

研究ノート

西海のオアシス  
——全町公園化構想——

原 哲 弘

(長崎国際大学 人間社会学部 国際観光学科)

Oasis in the Saikai  
—All-town Park Design Concept—

Tetsuhiro HARA

(Department of International tourism, Faculty Human and Social Studies,  
Nagasaki International University)

Abstract

The whole town parking concept and the green tourism concept began in Saikai-town, Saikai-city (formerly Saikai Town) in 1997, the rediscovery of regional resources and training of local human resources were carried out. Therefore, a green tourism concept begins as an early effort in Japan, centered on the ecotourism concept using Isaoura Dam Lake and the former Saikai town Koba area (direct sales place “Yokatokoro”).

Furthermore, there was a message that there was “a bell” of Yokoseura Cathedral in Sawada Miki Memorial Hall in Oiso Town, Kanagawa Prefecture. The all town parking concept was supposed to advance rapidly. People of the Yokoseura district wanted to disseminate the fact that the presence of “Yokoseura Cathedral” and “Thought Bridge” had a strong influence on the spirituality of local people and existed ahead of Nagasaki city residents' consciousness. Currently the Yokoseura Historical Park is the realization of the latent citizen consciousness as a hard business at the outset. It aims to learn the history, culture, and food of the land where the citizen lives, and it aims to explain the citizens themselves as sightseeing guides for tourists and make a interactive-type tourism town.

Key words

Portuguese missionaries, potential civic consciousness, looking for those in the region

要 旨

平成9年(1997年)より西海市西海町(旧西海町)では、全町公園化構想、グリーンツーリズム構想が始まり地域資源の再発見、地域人材の発見と育成が実施された。そこで伊佐ノ浦ダム湖を利用したエコツーリズム構想、旧西海町木場地区(直売所「よかところ」エリア)を中心とした日本でも早い時期の取り組みとしてグリーンツーリズム構想が始まる。

さらに神奈川県大磯町にある澤田美喜記念館に横瀬浦天主堂の「鐘」が存在するとの連絡があり全町公園化構想に拍車がかかった。横瀬浦地区の人々が語る「横瀬浦天主堂」、「思案橋」の存在が地域の人々の精神性に強く影響を与え、長崎市内より先んじて存在していた事実を広く発信したいとする地域住民の意識が強かった。その潜在する市民意識を発端にハード事業として具体化したのが横瀬浦史跡公園である。それにより市民自らが住んでいる土地の歴史、文化、食などを学び、観光客に対して市民自らが観光ガイドとして発信し双方向型の観光まちづくりとなることを目的としている。

キーワード

ポルトガル宣教師達、潜在的な市民意識、地域にあるもの探し

## 1. 建築デザインについて      コロニアル様式

医者は江戸時代より有識者が占め、それゆえ医者としての働きだけでなく地域の倫理観の規範となって指導的な立場にある人も多い。更に西洋医学書なるものは日本には少なく、海外から取り寄せた書籍や外国人による指導を受けて身に着けた知識でもある。いわゆる医者は西洋的な知識と西洋的な雰囲気漂う印象だと言える。

そこで江戸末期から明治維新にかけて19世紀の時代に焦点を当て建築デザインを考えてみた。長崎県にはスコットランドから長崎市に住み着いたトーマス・ブレイク・グラバー（英：Thomas Blake Glover、1838年～1911年）がいる。武器商人でありながら西洋の知識を日本に持ち込んだ人でもある。自宅は有名なグラバー邸であり日本の近代化遺産となり2015年世界遺産にもなっている。建築様式はベランダコロニアル様式と呼ばれ、東アジア南方で発展した植民地様式である。この様式はイギリスから始まり東回りでインドを抜けて日本に辿りついた様式である。一方、イギリスから西回りでアメリカの西部開拓を経てアーリーアメリカンと呼ばれたコロニアルスタイルがある。これはアメリカ東海岸から太平洋を渡って日本の北海道にたどり着く。つまり日本でのコロニアル様式は、イギリスを発祥地として起源をなし、一つは東回り、また一方は西回りを経て日本にたどり着き、合流して有識者たちに受け入れられたのである<sup>注1)</sup>。北海道札幌市の時計台、北見市にある宣教師の自邸であった旧ピアソン邸（ピアソン記念館）はアメリカ合衆国出身ウィリアム・メレル・ヴォーリズ（William Merrell Vories 1880年-1964年）が設計している。彼は日本で数多くの西洋建築を手懸け日本建築に大きな影響を及ぼしている。従って外国人居留地の家や日本人医師の家は、このコロニアルスタイルを用いて作られた建物が多い。

長崎県には教会群が上五島や福江島、外海町や平戸市、熊本県は天草の崎津に存在する。ま

た上五島出身の建築家・鉄川与助が設計施工によって手掛けた数多くの建築物がある。彼はフランスの宣教師・ドロ神父から田平教会などコンクリートの技術やレンガ組積造など数々の指導を受けながら教会群を作り上げている。従ってポルトガルと関係のある西海市の施設群の外観は、共通して「コロニアル下見板張り」の外観様式を取り入れ、観光客が周回するとき、景観に統一感のある建築群となるのを試みている。更に外壁の材料と色彩は、地場産の杉材を用い鉄分が混じる赤茶けた西海町の「大地の色」にしてオイルステインの材料で塗装している。これも景観が周辺環境と一体となる効果を狙っている。更に材料は地元で取得でき、改修工事も地元の職人さんの技術で容易にできるのである。

## 2. 持続する社会      設計コンセプト

### 2-1 西海市の人、技術、材料

産業革命以降は、技術革新をもたらした化石燃料の利用により爆発的な経済発展が始まった。同時に爆発的な人口増加は、生産人口の増加につながり食料増産の必要性をもたらすなど、あらゆる分野に化石燃料の活用と人口増加は影響を及ぼしている。化石燃料の利用は、従来の生活を一変して、便利で快適な生活をもたらした。しかし、その結果『負の財産』として地球温暖化や原子力発電による放射能の危険性など、顕著な問題を現代にもたらした。そして、ひとたび便利さを手に入れた人類は、理論的には「負の遺産」と理解できても、具体的な行動に移そうとすると、なかなか昔のような不便な生活に戻ることはいえない。理屈では悪いことだと理解できても中止することができない、辞めたくても辞めることができない削減できない理由が社会状況にある。

また海や川で漁をして魚を得て、畑では野菜を作り、山では薪を切って燃料とするなど、自然と係わりながら質の豊かな生活に憧れる人々も多い。しかし一度、便利さを手に入れると、なかなか元に戻れない現実があり、ほどほどの

便利さとほどほどの自然との係わりのある農的な暮らしや全く新たな暮らしの創造が求められている。長年、提唱されている「持続する社会」を作るという事は、決して昔に戻ることではない。確かに過去の先人たちの知恵については学ぶべきことが多いのも確かであるが、それをそのまま現代に持ち込んで、無理やり適合させるものでもない。そこには、同時代性との協調が必要となる。人間は、生きているのであり社会も生きている。従って生きている社会にあったシステムを作り上げなければ成らないのである。

建築や都市に関する法律は、都市計画法、建築基準法、景観法、リサイクル法、消防法、文化財保護法などなどがある。これら法律は「想像上の秩序」であり、さらに西海市の建築群も同時代に即した「想像上の秩序」で作り上げなければならない。そこで長期的な循環型社会を考えて、基本コンセプト（想像上の秩序）を、「西海市の人、技術、材料にこだわって作り上げること」としたのである。それは西海市には、人々の暮らしの中に技術が既にあり、現在においても市民が普通に使っているからである。

例えば石積の技術は、市民が日常に棚田などの修復作業で身に付けている崩れ石積み技術であり、材料の石は土地の発生材として出てきた材料を使っている。また外観デザインは前章で述べたように「コロニアル下見板張り様式」を採用し、工事する人材は地元の人々へ仕事が還元できるように細分化を試みて、できるだけ小規模にして家族でも生業を営んでいる工事会社が受注できるように工夫をした。材料は地元で取れる石材に留まらず木材、竹炭、それにとりもなう技術を多用し継続的に伝承、修復、保全できるように試みている。

## 2-2. 全町公園化構想計画（地域にあるもの探し）

全町公園化構想は地域資源の再発見、地域人材の発見と育成が試みられた。「点」となる拠点に【五感を感じるオアシス（癒し、時、味覚、

祈り）】を配置し、①癒しのオアシス（伊佐の浦地区 写真-1）：伊佐の浦ダム周辺のコテージ群、②時のオアシス（七ツ釜地区 写真-2）：七ツ釜鍾乳洞公園と管理棟、③味覚のオアシス（木場地区 写真-3）：「みかんどーム」から始まるグリーンツーリズム運動。④祈りのオアシス（横瀬浦地区 写真-4）は日本最初のキリシタン大名・大村純忠が洗礼を受けた場所である。それら4つのオアシスを農道整備やサイン計画を行い、4つのオアシスをネットワークで繋ぎ、そこにグリーンツーリズムの様々な体験を盛り込んだ計画である。



写真1 ①癒しのオアシス  
(2000年10月筆者撮影)



写真2 ②時のオアシス  
(2001年11月筆者撮影)

【五感を感じるオアシス（癒し、時、味覚、祈り）】、それぞれの「点」が個性ある拠点となり、農道整備が進むことで「点」から「線」としてつながり、将来的には「面」となる「点描まちづくりの手法」によって作り上げた観光まちづくり群である。これら西海市西海町を公園に見

西海市観光まちづくり年表

(筆者設計—基本構想、基本設計一覧)

- |         |                         |      |
|---------|-------------------------|------|
| • 1999年 | 西海町全町公園化構想策定            |      |
| • 2000年 | 伊佐の浦コテージ完成              | 写真-1 |
| • 2001年 | 七ツ釜鍾乳洞公園完成              | 写真-2 |
| • 2002年 | みかんドーム&道の駅完成(西海町温浴施設保留) | 写真-3 |
| • 2003年 | 横瀬浦史跡公園、運動公園・児童公園完成     | 写真-4 |
| • 2004年 | 船番所移設・保全工事完成            | 写真-5 |
| • 2009年 | さいかい元気村開村(西海市西海町中浦北郷)   |      |



写真3-③味覚のオアシス

(みかんドーム(右)と温浴施設(左)模型 2002年2月筆者撮影)



写真4 ④祈りのオアシス

(2003年7月筆者撮影)

立てた点描まちづくり建築・公園施設群は、1997年(平成9)年より西海市西海町(旧西海町)にて構想が始まった。

2-3 全体修景計画：横瀬浦史跡公園の既存施設改修と海のシルクロード広場

船番所は1714年鎖国時代、長崎奉行の指示によりに西海市西海町寄船地区に大村藩が佐世保湾の外国船取締りを行う施設として完成したものである。俵ヶ浦半島の高後崎にも平戸藩による船番所の跡がある。2002年個人が住宅として

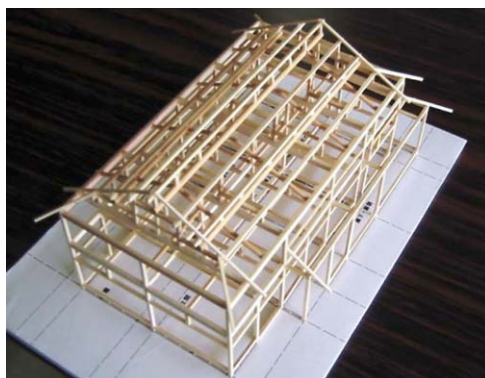


写真5 船番所模型

(2003年6月筆者撮影)



所有していた番所を解体する際に、譲り受けて横瀬浦港に移築したものである。そして、やすらぎの交流空間の目的で海産物の販売・飲食施設として2004年に完成したものである。

#### 【 設計単位と協力体制 】

設計モジュール（基本単位）を16世紀、ポルトガルで用いられたプラザ単位（2.2m）で設計し、地元大工・石工の参加、司馬遼太郎記念館（当時館長 上村洋行氏）・澤田美喜記念館（当時館長 鯛茂氏）の協力、さらにポルトガル大使館と彫刻家（坂井公明氏）の協力により完成した。

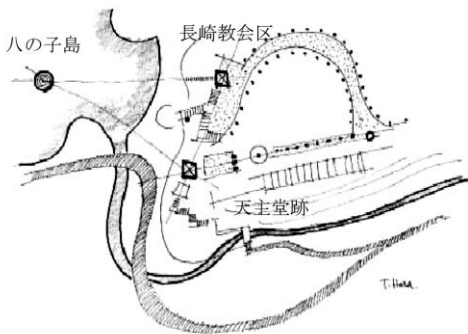


図1 全体スケッチ

#### 1) 地場の人、技術、材料の検討

##### (1) 崩れ石積みの工法【石工の3点積に学ぶ】

地域に算出する蛇紋岩、玄武岩、温石石を利用した石積など、地域に算出する石材を利用するのを心がけ積み方を崩れ石積（図2）とした。

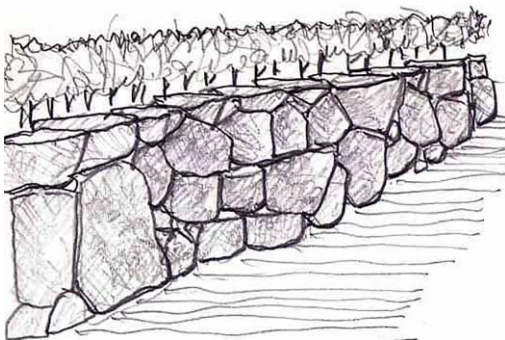


図2 崩れ石積み

また日本では、長崎県産として著名な砂岩（諫早石）を用い長崎県特有の景観作りになることに配慮した。

#### (2) 田舎の良さを残す景観作り【周回遅れのトップランナー】

昨今、住宅メーカーのデザインによる景観が日本中で見受けられるが、地元大工職人の技術による在来軸組み工法（構造体）を基本に据えて全て木造建築物とした。また外壁材にも杉木材を用いデザインをコロニアル下見板スタイルとした。これにより完成後、問題が発生したときにも改修工事が地元大工職人により容易にでき、しかも改修費用を最低限に収めることができるのである。更に色彩計画は西海町の大地の色を外壁の色とし景観と調和するように配慮した。

#### (3) 厄介者の竹林の問題【負から正の財産へ】

減反政策、後継者不足がもたらす休耕田には、次第に竹がはびこり問題となっている。そこで問題児である竹を建築材料として利用する問題解決を試みた。一つは、在来の竹炭を床下へ（6畳に対して1kgの割合）敷き詰めることで空気浄化作用、湿度調整機能を持たせた。二つ目がベニア型枠の変わりに竹を型枠変わりに利用することで脱型後の産業廃棄物を減らし、竹の素材が地域の景観作りとすることを試みた。これによって「負の財産」である厄介者の竹を「正の財産」となる建築材料として活用できる効果を期待した。

#### (4) 人と技術、それに材料の3つが兼ね備わった景観

西海市はマキの木による防風林、崩れ石積、木造建物でコロニアル様式の下見板張りの外壁が大地の色と同じ壁面が地域の持続的な景観となるように考えた。

### (5)横瀬浦天主堂の鐘

横瀬浦天主堂の鐘は、まだ西欧における教会建築を見たことがない西海の職人たちは、お寺の屋根の隅に下がる「風鐸」を利用した「鐘」を考えた（あるいは活用した？）と思われる。横瀬浦公園にある天主堂の鐘はレプリカで本物は、現在 神奈川県大磯市にある澤田美喜記念館に所蔵展示されている。



写真-6  
(横瀬浦天主堂の鐘：澤田美喜記念館所蔵  
筆者撮影2002年9月)

## 3. 横瀬浦港でのポルトガル宣教師達

### ルイス・フロイス神父

ポルトガル人宣教師であるトーレス神父、アルメイダ神父、それにフロイス神父などの宣教師達が本国へ送った書簡が残っており、著名なものにはルイス・フロイス神父が残した「フロイスの日本史」がある。特にアルメイダ神父の書簡集は当時の横瀬浦天主堂の様子が詳細に書かれている。史実に基づいて計画・実施することは観光まちづくりの王道であり、最も基本的な手法の一つである。ただ問題は、長い禁教令の影響で日本側の歴史記述が全く無く、史跡として残っていないのが実情であった。平成10年(1998年) 当時は横瀬浦地区の丘の上に「既存の塔」が建っていたこともあり、史実に基づい

た忠実な復元でなく、できるだけ史実を理解し既存の塔を再整備しながら〈未来に向かって継承できる公園施設〉となることを選択した。

更にまた、イタリア人イエズス会巡察師、アレサンドロ・ヴァリニャーノ神父が1579年に来日し、1580年から1581年にかけて豊後、安土、長崎で布教協議会を開催し、日本に適した布教方針を確立した。その内容は、日本の習俗と気質に関する注意と警告と題して、1. 日本管区事情摘要という名目で示されている神父等が考えた布教方針書は、1583年ゴアのコレジオからローマに送られ「ヴァリニャーノの委託によりドナルド・デ・サンテが移した」との著名があるポルトガル写本がローマ図書館に、ただ一冊のみ現存する。この文献を1964年にヨゼフ・シュッテ氏がポルトガル語からイタリア語に訳して出版し、更に1970年、矢沢利彦、筒井砂両氏がイタリア語を日本語に翻訳し「日本イエズス会士礼法指針」と題して出版(『日本イエズス会士礼法指針』(1970) 矢沢利彦、筒井砂 訳 キリシタン文化研究会)<sup>注2)</sup>された。近世において建てられた教会建築を研究する時に注目される資料である。ヴァリニャーノ巡察師による「日本イエズス会士礼法指針」の設計指針一部(元宮健次(2005)『近世日本建築の意匠』株式会社雄山閣)<sup>注3)</sup>を下記に記述する。

### 3-1. ガザ、コレジオ、レジデンシアについての指針

- 1) 座敷を設けること
- 2) 各種作業室は日本的平面計画を用いること
- 3) 座敷には日本家具を用い、また開け放つことによって、いくつかの座敷が連続して大きな座敷になること
- 4) 耐火構造を用いること
- 5) できるだけ平屋にすること
- 6) ガザには接客のための座敷と茶室、それに付属した庭とパードレらの部屋を設けること

- 7) 縁側を作る場合には、座敷の上段、下段それぞれの出入り口を明確にすること
- 8) 門衛詰所を設けること
- 9) 藩主等（領主等）の集まる地域のガザでは、専用の座敷及び茶室を設けること
- 10) 宣教師の部屋を奥まった場所に配置すること

### 3-2. 教会堂についての指針

- 1) 正面性について、仏寺の様に広い間口を正面とせず西欧の教会堂と同様に狭い間口を正面とし、奥行きを深くすること
- 2) 礼拝堂の両脇には座敷を設けて扉を閉めれば一体となること
- 3) 前面に日本式の縁側を持った小庭を設けること
- 4) 付近に屋根付き足洗い場及び便所を設けること
- 5) 隣接して女性専用の座敷を設けること

### 3-3. 全体としての指針

- 1) 日本の大工技術によって施工されること
- 2) 一度に完成できない場合は、増設しつつ完成すること



写真-7 地元職人の作業風景  
(筆者撮影2003年10月)

術やデザインでなく日本の大工技術によって施工されることが明記したことである。

つまり西欧の技術やデザインを強制的に押し付けるのではなく、日本人自らの技術とデザインによって作り上げることを指針に盛り込んだことにある。筆者も西海市の観光まちづくりを考え『持続する社会』の実現となるように取り組み、第2章で述べたように西海市の人、技術、材料にこだわって作り上げたものだが、結果としてヴァリアーノ巡察師による「日本イエズス会士礼法指針」の設計指針一部にある3. 全体としての指針、1) 日本の大工技術によって施工されること、2) 一度に完成できない場合は、増設しつつ完成すること、の記述と同じ基本コンセプトとなったのである。『日本の大工の技術』を『西海市の大工の技術』と読み替えると、西海市の人、技術、材料にこだわって作り上げたものと言い換えることができる。

疑問に残るのは、宣教師たちが西欧の建築デザインと技術を日本人に教え、強要しなかったことである。「南蛮渡来風俗図屏風」(逸翁美術館蔵サンタ・マリア教会 1601年建造)を見ると明らかに木造建築物で縁側を配し、瓦屋根の頂部に十字架を配置した天主堂である。キリスト教の布教の際に西欧における教会建築を教える知識はあったにも関わらず、教会建築のデザインを強要しないで、日本人が考える教会を日本の技術で作らせた事になる。従って横瀬浦天主堂の鐘が、西欧にある教会の鐘と全く違う形をしており、日本人の手による仏教寺院の風鐸のような鐘のデザインであることが、日本人の考えに寄り添って布教を行ったと考える方が自然のように思えてくる。そういう事を加味しながら、「日本イエズス会士礼法指針」を読むと仏教寺院のような横瀬浦天主堂の鐘のデザインができた理由に納得がいくのである。

特に興味を覚える記述は、3-3 全体としての指針ではポルトガル人自ら学んだ西欧の技

#### 4. 観光まちづくり

##### 巡礼ツーリズムと観光ガイド

##### 4-1. 市民意識の芽生え・地域学の勉強会と観光ガイド

横瀬浦の歴史を発信できるハード部分が完成後、平成16年（2004年）5月に横瀬浦史跡公園が学校教育に活用され、観光ボランティアガイドの育成として「西海学」の勉強会が開催されている。また天正遣欧使節団の一人であった中浦ジュリアンが、2007年にローマ教皇から“福者”に選ばれたことで中浦ジュリアン記念公園と併せて巡礼ツアーの開催が行われた。そして長崎の教会群とあわせた巡礼ツアーが実施されている。今後は市民の各種団体の活動が活発になり、さらに歴史を掘り起こし地域観光資源を創出し、地域間ネットワークによる巡礼ツーリズムの創造、建築材料の地産地消を行うことで雇用の確保と技術の伝承が行われることを願っている。

その他、交流人口を増やすことが狙いとなるグリーンツーリズム構想に沿って、みかんだムや伊佐ノ浦公園（コテージ群、レストラン）、それに七ツ釜鍾乳洞公園・管理棟、街路サイン計画など土地の自然環境や材料と技術、それに人々の暮らしを最大限に活用した計画が進め、それらが着地型観光地・西海市の観光まちづくりとして次第に成果が現れてきている。

##### 4-2. インバウンド観光への取り組み

少子高齢化、後継者不足など国内を見るとデメリットと言える要因が数多く存在する。そこで、日本人にとって不慣れなインバウンド観光を考える。今までの経済活動を維持するためには交流人口を増やすことは、長年、取り組んでいることである。そこから第1次産業（農林水産業）や第2次産業（製造・加工業）、更に第3次産業（体験・サービス業）を盛り込んだ第6次産業（グリーンツーリズム、ブルーツーリズム）への取り組みは、田舎を武器にした着地型観光である。爆発的な経済効果は期待できな

いが、世界中の世界遺産施設を見たような成熟した観光客が、地域にある本物の魅力に魅せられた人が参加する成熟した観光が【着地型観光】である。西海市では2009年より着地型観光を、いち早く取り入れた。

西海市西海町では1997年（平成9）年木場地区（直売所「よかところ」エリア）を拠点とした日本でも早い時期の取り組みであるグリーンツーリズム構想が始まる。その後、木場地区に「みかんだム」の完成を向かえ、グリーンツーリズムステーション（GTS）が稼動する。たまたま約1970年に開墾されたみかんだ畑が1990年より放置された地元農地があったのを、どうにか再生できないものだろうか？という市民の意向に沿い、2009（平成21）年8月1日 着地型・体験農園「さいかい元気村」（第6次産業）として開村した。

「さいかい元気村」は、さいかい元気村協議会が母体となっている。さいかい元気村協議会は3つの部会からなり、グリーンツーリズム部会、特産品開発部会、景観作り部会がある。また自治体の長崎県、西海市農林、西海市水産商工観光、のら体験工房、西海市観光協会が協議会に参加している。さらに運営システムは、農の塾（循環型の自然農を体験する）は、大豆、そば、堆肥づくり教室などを実施。住の塾（楽しい家づくりを体験する）ではストロベールハウス、コンポストトイレ、自然エネルギー教室などを実施。食の塾（地域の食材を活かした郷土食やパン作りなどの体験）では郷土料理教室、アースオープン、ジャム、シフォンケーキづくりを実施。最後に遊の塾（里山、川、海などの季節の遊びを楽しむ）ではツリーハウス、コブハウス、手長エビ取りを実施している。

これらの4つの塾を春夏秋冬の四季の変化に合わせた年間プログラムを作り、都市住民に対して西海市での農業体験を着地型観光として取り組んでいるのである。

平成29年度 現在では、さいかい元気村協議会（山と海の郷さいかい）により12軒の民宿施



設が開設されている。また海外から長崎への来客では、台湾からの来客も多くなってきている。従って平成29年度は、台湾語（繁体文字）、英語、韓国語によりインバウンド用のプロモーションビデオやパンフレットを作成して外国人観光客の対応をする予定である。特に台湾をターゲットとした海外戦略が取られ、観光客数の推移を下記の表で示す。

平成28年（2016年）は、熊本地震の影響があり減少しているが、地震が落ち着いた

平成29年度は、平成27年度を超える勢いで外国人観光客が増加している。

#### 4-3. 長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産

「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」が、世界遺産の推薦書として2017年2月にユネスコへ提出された。また日本が欧州に初めて公式派遣した天正遣欧使節団は、伊東マンション、原マルチノ、千々石ミゲル、そして西海市出身の中浦ジュリアンである。つまり西海市は、中浦ジュリアンや横瀬浦天主堂関連を見に来る観光客の増加が見込まれる。またルイス・フロイ

スが1563年に、初めて日本の大地を踏んだのが西海市であり、彼がまとめた「フロイスの日本史」の記述は、当時の日本を知る貴重な資料になっている。大村純忠が、ここで日本最初のキリシタン大名になった事、長崎甚左衛門がいて、思案橋があった事が記述にある。

残念ながら、西海市には当時の物的資料が全く無く、想像の域を出ない状況にある。しかし横瀬浦天主堂の記述は詳細にアルメイダ神父やフロイス神父が書いているので、横瀬浦地区を考古学者の手によって発掘する事で歴史上の史実が、記述だけでなく物的証拠として説得力を持つようになるのである。いつの日か、歴史記念館（フロイス記念館）に物的証拠が展示されることを期待するばかりである。

#### おわりに

西海市では、平成11（1999）年11月に大島大橋が完成を迎える。それに伴って、船でしか通勤できなかった大島造船所への通勤が車通勤に激変する。同時に大島造船所は造船だけでなくホテル（オリーブベイホテル）も開業してプロ棋士名人戦の対局や造船関係顧客の受け入れ態

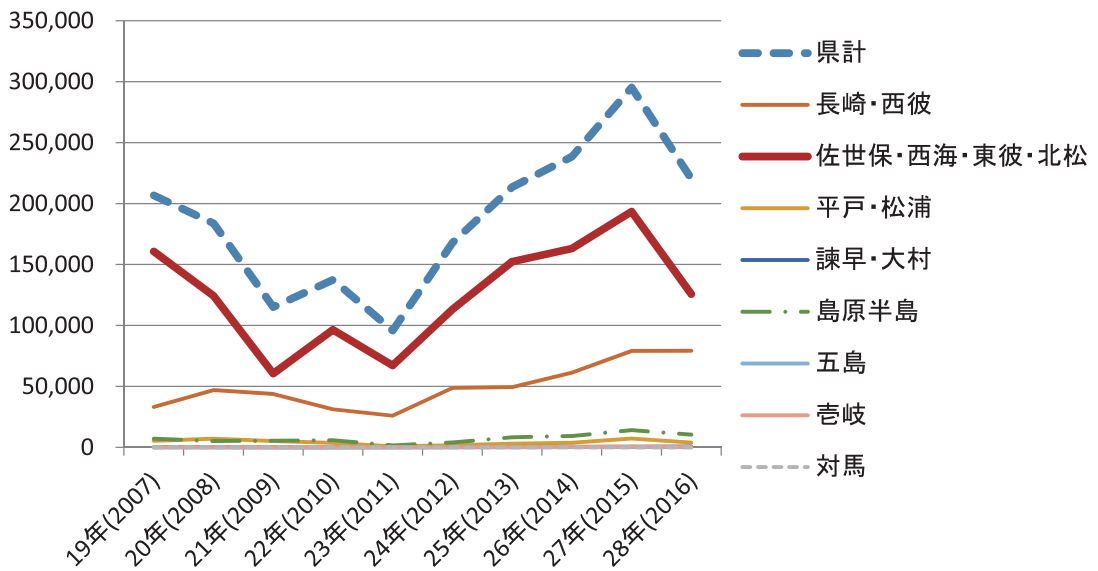


表-1 台湾からの観光客数の推移（2007年から2016年までの推移、単位：人）

勢を作り上げて西海市 GDP を引き上げている。

また西海パールラインも西海橋を渡った小迎 IC で終わっていたのが、現在（2017年）では、大串 IC まで伸びている。それによって佐世保市から長崎オランダ村に行くのも容易になった。更に大村湾では、無人島『田島』が体験型観光として都市圏の人々に人気があり、ハウステンボスや空港から船で移動することができる。また海外に目を転じると針尾島にある浦頭港が整備され、豪華客船が来る予定である。まさに豪華客船による来場者のオプションルツアーとして佐世保湾と大村湾のクルージング観光（メビウス航路）<sup>注4)</sup>が適している。大村湾には長崎空港があり空港の港から西海市にある長崎オランダ村まで船による時間距離も30分足らずである。つまり車のアクセス、船によるアクセスが便利になって西海市に行くのに時間距離が非常に短くなっている。

受け入れ側の西海市の宿泊に関しても自然、農、食をテーマに滞在型、着地型観光に力を入れて、西海エリア、大瀬戸エリア、西彼エリアの3つのエリアに民泊体験施設ができています。従って爆発的な観光による経済活動は期待できないにしても、着実に交通体系や情報発信、更に市民の受け入れ態勢づくりと市民の学びが進んでいることになる。全町公園化構想とグリーンツーリズム構想が次第に実を結び、次には、インバウンド観光を戦略的に策定し、いよいよ世界に発信する準備の段階に来ている。

## 参考資料

### 1. 表

- 1) 表-1 平成28年度長崎県観光統計より抜粋

### 2. 写真、図（スケッチ）

- 1) 写真-1～写真-7 すべて筆者撮影による写真である。

横瀬浦教会の鐘は、澤田美喜記念館に所蔵（神奈川県大磯市）されており、横瀬浦公園に展示してある鐘はレプリカ（製作者：彫刻家 坂井公明氏）である。

- 2) 図-1、図-2、すべて筆者作成である。

- 3) 「南蛮渡来風俗図屏風」（逸翁美術館蔵）被昇天の聖母教会（サンタ・マリア教会）  
岬の境界（1601、慶長6）年建造（江戸町 長崎県庁）

## 3. 注

注1) 藤森照信（1993）『日本の近代建築〈上 幕末・明治篇〉』岩波新書 3頁～56頁

注2) ヴァリニャーノ巡察師による「日本の習俗と気質に関する注意と警告」は1583年2月5日付でゴアのコレジオからローマへ送られ、ドナルデ・デ・サンテが写したとの著名のあるポルトガル語写本が、ローマ図書館に唯一冊のみ現存している。その後、この資料は1946年にヨゼフ・ヒュッテ氏によりイタリア語訳されて出版された。更に1970年に、矢沢利彦、筒井砂 両氏が和訳し「日本イエズス会士礼法指」として出版されている。（1970）矢沢利彦、筒井砂 訳 キリシタン文化研究会。

注3) 元宮健次 著となる出版物で（2005）『近世日本建築の意匠』株式会社 雄山閣 166頁～169頁を参照。

注4) メビウス航路は、筆者が長年実践しているクルージングで、車社会にあって長崎県は海から見ないと理解できないことが多いことから、観光資源を佐世保湾や大村湾をクルージングする取り組みである。3本の針尾無線塔跡や片島魚雷発射試験場跡などの近代化遺産時代を鳥瞰することができ、里海、里山など人々の生業を発見することができるクルージングの事である。

## 4. 参考図書

- 1) ルイス フロイス（著）、柳谷武夫 訳（1965）『日本史2ーキリシタン伝来のころ』東洋文庫35 株式会社 平凡社 202頁～210頁
- 2) 司馬遼太郎（1983）『街道をゆく11 肥前の諸街道』朝日新聞社 134頁～155頁
- 3) 藤森照信（1993）『日本の近代建築〈上 幕末・明治篇〉』岩波新書 3頁～56頁
- 4) 原 哲弘（1999）西海町公園整備概略設計報告書 西海町経済課 1頁～4頁
- 5) ルイス フロイス（著）、松田毅一&川崎桃太（翻訳）（2000）『完訳フロイス日本史〈9〉大村純忠・有馬晴信篇(1)』中公文庫 83頁～97頁
- 6) 原 哲弘（2002）『UPA report Vol 1』(株)ユニコム企画設計

- 7) 原 哲弘 (2003) 『UPA report Vol 2』(株)ユニ  
コム企画設計
- 8) 元宮健次 (2005) 『近世日本建築の意匠』株式  
会社 雄山閣 166頁-169頁
- 9) 原 哲弘 (2016) 『メビウス航路』長崎国際大  
学論叢 第16巻 79頁
- 10) 山と海の郷さいかい (2017) 『さいかいの体験  
民泊』西海市役所情報観光課